

文化・芸術

「牛乳屋」

1930、33年 色鉛筆、紙
22・2枚×15・1枚

茂田井武 (1908、56年)

パリでの生活を始めた茂田井武は、2カ月もすると慣れてきたのか、次のように回想しています。

「今度は、マドモワゼル方が気がなりはじめました。毎朝配達にくる牛乳屋の娘さんや長い籠に長いパンを入れてくる娘さん達が天使のやうに見えました。思はず皿やコップを取りおとしては叱られる有様」(「欧州珍栗毛」へ1949年から)

パリではエトランゼ(異邦人)であっても、若者であれば、美しいお嬢さんに関心が向くのは無理からぬことだったといえます。ただ、この作品に描かれた「牛乳屋の娘さん」は、何ともかれんで「天使」のように優美です。ひょっとして現実の「マドモワゼル」以上に美しいといえるかもしれませんね。茂田井の中で、とても理想化されて表現されているともいえるでしょう。彼にとって、想像をふくらませ、イメージを純化しながら小さな画面に描くことは、後年の絵本画家としての創作にどれほど役立ったことでしょう。(田中)

《名画の扉》

大川美術館「茂田井武-パリ青春日記
ton parisを中心に」展から

